

式辞

春の息吹が感じられる今日の佳き日、保護者の皆様や同窓会長様の御臨席を賜り、第七十回滋賀県立膳所高等学校卒業証書授与式を挙行できますことは、本校にとりましてこの上ない慶びとするところであります。

保護者の皆様には、三年間の高校生活を経て、立派に成長してこの日を迎えられたお子様の姿を御覧になり、感慨も一入のことと存じます。改めまして心よりお祝い申し上げますとともに、この間、本校の教育活動に多大の御支援、御協力を賜りましたことに対しまして、高いところからではございますが深くお礼申し上げます。

さて、ただ今卒業証書を授与された卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。膳所高校での三年間を振り返り、皆さんの胸には今、どんな思いが宿っていますでしょうか。

皆さんは膳所高校第七十期生として、平成三十一年四月に、平成最後の入学生として高校生活をスタートされ、一月後には令和元年となり、新しい時代の歩みとともに、ここ膳所の地で青春の日々を過ごされてきました。

毎日の授業やその予習と班活動などとの両立は大変だったでしょうが、仲間と励まし合いながら、一日一日の営みを積み重ね、高校三年間の課程を全て修了されて、今日、皆さんは卒業の日を迎えられました。その努力を心から讃えたいと思います。

その日々の中には、順調なことばかりではなく、思うようにならないこともあったでしょう。特に、新型コロナウイルス感染症の拡大により、一年生の三月から二年生の五月まで長い臨時休業となり、その後も二年間を通じて学習や班活動、学校行事などが大きな制約を受けました。中でも二年生で修学旅行が実施できなかったのは、本当に残念

なことでした。

けれども皆さんは、二年生の終わりに、膳所高祭を、ワイミットアリーナ草津において、「新型膳所高祭～コロナの壁をぶち破れ！千祭一遇の大一番～」をスローガンに実施し、三年生の四月には三重県への一泊校外学習を、一人の感染者を出すこともなく成功させました。

湖風祭も「青春（あお）に翔ける～湖風祭（まつり）で繋ぐNO密な絆～」をテーマとして、密を避けて感染を防ぐことと、湖風祭を盛り上げてみんなが一体感を感じ、濃密な絆を育むこととの両立に挑戦し、コロナの時代の学園祭の在り方を見事に示しました。

班活動においても、感染リスクに配慮しながら工夫して練習に取り組み、全国や近畿の大会にも多くの班が出場するなど、成果を残してくれました。

コロナ禍において、皆さんは様々な困難や理不尽さに直面したと思いますが、その中で課題解決に向け、仲間と議論し協働して力を合わせ、納得解を見出し、困難を乗り越えてきました。この間に学んだことは、これからの人生においてもきっと皆さんを支えてくれるに違いありません。

湖風祭や班活動でのこうした皆さんの姿は、後輩たちの素晴らしい手本にもなりました。皆さんが残してくれたものの大きさに、心からの敬意と感謝を贈りたいと思います。

一方、皆さんがこの日を迎えられたのは、皆さんの努力と精進の賜物であることは言うまでもありませんが、あわせて、陰になり日向になりして支えてくださった御家族、先輩方、友達、地域の方々、そして本校の先生方の存在があったことも忘れずにいて欲しいと思います。

さて、皆さんはこれからこの学び舎を巣立ち、新しい世界へと進んで行くわけですが、これから世界は、デジタル化、人工知能の発展、地球規模の気候変動などにより、いろいろな分野で現状の制度が覆されるような、広く深い変化に直面することでしょう。その世界を、これからよりよいものとしていくのは皆さんです。未来の社会はどうしようもないものとして現れてくるのではなく、皆さんが主権者として主体的に創っていくものです。

こうした世界において未来を形作り、そこで活躍するために必要な能力として、OECD（経済協力開発機構）が挙げている力の一つに、対立やジレンマに対処する力、があります。

人は皆それぞれの考えを持っています。みんなそれぞれに考え方が違うと、物事はなかなかうまく進んでいかないことが多いものです。皆さんも班活動や湖風祭などに取り組む中で、考えの違いから対立やジレンマを経験したことがあったのではないのでしょうか。

対立やジレンマを解決する手段は、力ではなく、対話です。コミュニケーションが大切です。

そしてこれから求められるコミュニケーション能力は、自分の考えを論理的にわかりやすく伝えることができる、といったことだけに留まるものではありません。

フランス文学者で思想家の内田樹さんは、「コミュニケーション能力とは、コミュニケーションを円滑に進める力ではなく、コミュニケーションが不調に陥った時に、そこから抜け出す力である」と言っておられます。

また、劇作家の平田オリザさんは、現在必要とされている「コミュニケーション能力」

というのは、「心からわかりあうこと」や「お互いのことを完全に理解し合うこと」のための能力ではなく、ものの考え方も価値観もばらばらの人間同士が、ばらばらなまま
で共に生きていくための力である、と言っておられます。

そして、その力は具体的に何であるかと言えば、平田オリザさんは「他者に対して言葉で説明する能力」と「対話的な精神」だと言っておられます。「対話的な精神」とは、
「自分とは異なる価値観を持った人と議論を重ねることで、自分の意見が変わっていくことを潔よしとするような態度」であるということです。

コミュニケーションは、互いの異なる考え、背景を受け止めることから始まると思います。そして、その違いを力に変え、違いを活かす力を、皆さんには身につけ、伸ばしていってもらいたいと思います。膳所高校での経験はこれからの皆さんを支える力となるはずです。

そして、誰もが自分らしく生き生きと暮らせる社会を皆さんの力で創っていただくよう、期待します。

それでは、卒業生の皆さん、名残は尽きませんが、時代を超えて先輩から後輩へと受け継がれてきた本校の精神、校訓である「遵義・力行」を胸に深く刻み込み、自分らしくそして膳所高校の卒業生らしく、自分の強みを活かして活躍され、心豊かな人生を送られることを願って、式辞といたします。

令和四年三月一日

滋賀県立膳所高校

校長 富江 宏